



米国大使館

アメリカの素顔を映すマガジン

American View

アメリカン・ビュー

Summer 2010



民族の多様性とアイデンティティー

Graphic Novels



アジア系米国人のグラフィックノベル作家たちによるアイデンティティーの追究を紹介します。

Inspiration by Asia



アジア文化がいかに米国文化に浸透し、影響を与えるようになったか説明します。

Multiracial Family



多文化の環境で育った人間のアイデンティティー形成に関するインタビューです。

Religious Freedom



米国における宗教の多様性の拡大と信仰の自由の関係について論じます。



From the Editor

文化の多様性は、米国を表す特徴のひとつです。私たちの国は、新しいチャンスを探求めて世界中からやってきた人々によって作られました。今も毎日、世界中から移民が米国に到着しています。本号は、米国内のさまざまな民族グループに焦点を当て、彼らが相互に交流しながら、いかに独自の特徴を維持しているか考察します。

「グラフィックノベル——進化する芸術形式で取り組む新たなテーマ」では、ローレン・モンセンが、漫画とせりふを組み合わせた「グラフィックノベル」の分野で活躍するアジア系米国人作家について語ります。このジャンルを通じて、作家たちはアイデンティティー、文化的ルーツ、アジア系米国人として直面する社会問題などを追究してきました。

ほかの分野でも、アジア系米国人は米国の文化的特徴に多大な影響を及ぼしてきました。ベトナム生まれの米国人作家アンドリュー・ラムは、「哲学から食べ物まで——アジア文化から刺激を受ける米国人」という記事で、ヨガや太極拳から風水、日本のアニメに至るまで、あらゆるアジア的なものに対する関心が米国内で高まっていると書いています。そして、アジア料理や武道のような文化的要素が、いかに米国の文化的主流に浸透してきたか説明しています。

米国では、多文化の環境で育った人々が、人口の大きな部分を占めています。多民族の血を引く人間のアイデンティティーについて回顧録を著

したレベッカ・ウォーカーは、ユダヤ系白人文化とアフリカ系米国人が多数を占める文化の間を歩き来しながら成長しました。彼女はインタビューで、多文化の経験が自分のダイナミックな世界観の形成にいかに役立ったかを説明しています。

最後に、ダイアナ・L・エックの宗教の多様性に関する記事を掲載します。米国には世界中からさまざまな人々がやってきて市民になります。その際、彼らはさまざまな宗教的伝統も持ち込みます。過去数十年間に、米国は世界で最も宗教的に多様な社会になりました。このような宗教的多様性の拡大により、米国憲法が長年保障してきた信仰の自由を守るに当たり新たな課題が生まれています。

オバマ大統領は就任演説で、米国の「多様性という遺産」は弱点ではなく長所であると語りました。多様性は時に、国内に衝突を生む要因にもなりますが、さまざまな経歴を持つ人々が集まり、各々の強みを社会のために活用することもできます。本号の記事や写真をご覧になって、文化的多様性がいかに米国で拡大しているか理解していただければ幸いです。

フィリップ・ホフマン
広報・文化交流担当公使

American View

—2010年夏号—

編集・発行
在日米国大使館広報・文化交流部
〒107-8420 東京都港区赤坂1-10-5

本誌掲載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。本誌に掲載されている記事、写真、イラストを非営利目的で複製することはできますが、著作権上の制限が明示されている場合には、表示された著作権者の許可を得てください。

本誌に対するご意見・ご感想は、*American View* のメインページ (<http://japan.usembassy.gov/amview/j/amview-jcomments.html>) のフォームで送信してください。

<表紙> サッカー・ワールドカップの米国代表チームは、民族的に多様であった。(© AP Images)

Photo Gallery

サッカー・ワールドカップ米国代表
ひとつのチーム、多様なルーツ



ワールドカップの自国代表に選ばれることは、サッカー選手にとって究極の目標。2010年南アフリカ大会でこの目標を達成した米国人選手のうち、十数人が移民家庭の出身だった。エドソン・バドル（写真左）、ランドン・ドノバン（同中央）、ベニー・フェイルハーバー（同右）はいずれも、米国代表チームでプレーしているが、ルーツは別の国にある。今年のワールドカップ米国代表は、これまでで最も民族的に多様なチームであった。（写真 © AP Images）



ベニー・フェイルハーバー（ミッドフィールダー、写真後方）は、6歳の時にブラジルから米国にやってきた。（写真 © AP Images）



エドソン・バドル（フォワード）の父親はジャマイカ出身のプロ・サッカー選手だった。（写真 © AP Images）



ティム・ハワード（ゴールキーパー）の母親はハンガリー出身である。（写真 © AP Images）



オグチ・オニエウ（ディフェンダー）。彼の両親はナイジェリア出身で、大学で学ぶために米国にやってきた。（写真 © AP Images）



キャプテンのランドン・ドノバンの父親はカナダ出身だ。（写真 © AP Images）



米国のセンターフォワード、ジョー・ガエトヘンス（写真中央）は、1950年のワールドカップ米国代表チームのメンバーだった。このチームは、20世紀前半の米国への移民の動向を反映し、ポルトガル系とイタリア系の選手が多数を占めていた。サッカー・ジャーナリスト、スティーブン・ゴフは「米国のサッカーは、人種・民族・経済的多様性の点で劇的に変化した」と述べた。ゴフによれば、現在のワールドカップの米国代表チームは「さまざまな生い立ちの白人、黒人、ラテンアメリカ系の選手で構成」されており、ヒスパニックとアフリカ系が米国最大の民族的マイノリティー・グループであるという事実を反映している。（写真 © AP Images）



さまざまな移民グループとの関係強化を果たしたのは、米国のサッカー運営組織である米国サッカー連盟 (USSF) のスニル・グラティ会長の功績である、という声がある。5歳の時にインドから米国に移住したグラティ会長は、サッカーは誰もがプレーできるスポーツであり、非常に国際的で、多文化的である」と述べている。

(写真 © AP Images)



USSF スポークスマンのニール・ブースは、米国では、サッカーは「郊外に住む白人のスポーツ」という見方が一般的だったが、現在はサッカー選手の出身背景は多岐にわたっている、と言う。米国大学サッカーの年間最優秀選手に贈られる「ハーマン・トロフィー」の過去3年間の男子受賞者は、2009年のティール・バンベリー（写真右）などアフリカ系米国人だった。

(写真 © AP Images)

Graphic Novels

グラフィックノベル 進化する芸術形式で取り組む新たなテーマ

アジア系米国人作家による
アイデンティティーと文化的ルーツの探究

ローレン・モンセン
米国国務省スタッフライター

近年、アジア系米国人の漫画家や作家が、かつて主に青少年に人気のあった表現手段である漫画やグラフィックノベルに大人の感性を加味した、知的な作品の作者として、かなり知られるようになってきた。

「グラフィックノベル」とは、漫画とせりふを組み合わせた表現方法のひとつだが、従来の漫画より大人向けのテーマを扱う。現在、このジャンルに、アジア系米国人作家が自らの視点を加えている。グラフィックノベルを通じて、エイドリアン・トミネ（日系4世）、ジーン・ルエン・ヤン（中国系米国人）、デレク・カーク・キム（8歳で米国に移住した韓国系米国人）などの作家たちは、アイデンティティーについての問題、文化的ルーツ、白人多数派社会で民族的マイノリティーとして育つことに関連する社会問題などを考察している。



現代の生活を皮肉とユーモアを交えて描いた「Shortcomings」の作者、エイドリアン・トミネ。右は、ペンとインクで描いた自画像（写真 Courtesy photo）

「Optic Nerve」という漫画シリーズの作者であるトミネ氏は、まだ10代のころに作品を自費出版し、ある種天才として知られるようになった。現在トミネ氏は30代半ばで、パブリッシャーズ・ウィークリー誌が「たまらなく魅力的なグラフィックノベルの傑作」と称賛した「Shortcomings」（2007年）の作者である。この作品は、30歳の日系人ベン・タナカという登場人物を中心に、文化的同化、人種が異なる人間間の交際での心のあや、そして時に屈辱的な自己発見の過程について問題を提起している。

トミネ氏はインタビューで、「Shortcomings」

は主人公が日系人なので、自伝だと誤解されることがあると述べた。「『Shortcomings』は全くのフィクションだが、長年心に留めたり観察したことから生まれた作品」と言う。

「漫画家として働き始めたころ、なぜ自分の民族的伝統について描かないのかと頻りに尋ねられたので、ちょっと驚いた。民族的マイノリティーの人間が創作活動を行う時には、自分の経験だけに焦点を絞るべきだと思われることに少し反感を覚えた」とトミネ氏は

は当時を思い起こして言った。「でも時間がたつにつれ、自らの経験を描きながら、自分のほかの仕事との一貫性を保つにはどうしたらいいか考えるようになった」と言う。トミネ氏は、アジア系米国人であろうと、ほかの誰であろうと、一般化を意識的に避けた。「私にとっては、教訓めいた発言やスタンドプレーを避けることが大切だった」と語った。

「Shortcomings」の書き出しでは、主人公のベンとガールフレンドのミコが、カリフォルニア州バークレーで一緒に暮らしていることが語られる。ミコは、ベンが白人女性に魅力を感じている

のではないかと疑っている（それは本当だが、彼は否定している）。放っておかれて悲しくなったミコは、表向きはインターンシップを受けるという理由でニューヨークに旅立つ。ベンは、ミコが本当は別れようとしていることに気づいていない。2人の関係は単に一時休止の状態であり、ミコの不在は、彼女に知られることなく白人女性とデートできるチャンスと考えている。その後しばらくして、ベンは友達に強く勧められてニューヨークに行く。そしてミコを探し出すが、ミコに新しい（異なる人種の両親を持つ）ボーイフレンドがいると知ってショックを受ける。

トミネ氏の地味な白黒の絵と完ぺきなせりふ回しによって、主人公の自己偽善が明らかになる。ベンは、自分には違う人種の女性と交際する権利があると感じているが、ミコが同じことをすると嫌がる。「Shortcomings」は短い場面が次々と切り替わって物語が展開し、混沌（こんとん）としがちな現代生活を描きながら、ベンが成熟への第一歩を踏み出した可能性を示唆する。「この物語の結末は読み手の解釈に任せてあり、もどかしく思われるかもしれない」とトミネ氏は言う。作者は今後の作品にベンを再登場させるつもりはないため、彼の今後はあいまいなままであろう。

トミネ氏は「私が、ベン・タナカを描き続けることは簡単だし、楽しくもある。だからこそ、私は描き続けるべきでないと思う」と付け加えた。「『Shortcomings』が完ぺきな作品とは思っていないが、この物語を続けていけば、これまでにつ

くり上げたものを損なうだけなのは間違いない」。彼の次の作品は、フルカラーのイラストで描いた、それぞれ関連性のある作品を集めた短編集である。



ジーン・ルエン・ヤンは、「American Born Chinese」の作者で、短編集「The Eternal Smile」の共同執筆者
(写真 First Second Books)

ーとしての立場に反発する10代の中国系米国人の物語を織り交ぜた作品である。キム氏は、米国で育ったが韓国の思い出も持ち続けている韓国系米国人1世の視点を持っており、その短編集は、登場人物であるカリフォルニア州北部に住む韓国系米国人の弱点をユーモアたっぷりに描いている。友人であり仕事仲間でもあるヤン氏とキム氏

は、新たに出版した「The Eternal Smile」(2009年)を共同執筆した。この作品では、ヤン氏がせりふを書き、キム氏が絵を描いた。

グラフィックノベルのファンは、急速に拡大している。つまるところ、トミネ氏のような作家はこのジャンルを用いて面白い話を書きたいと思っている。「『Shortcomings』に対する最高の賛辞は、面白かったという言葉だ」とトミネ氏は言う。

Inspiration by Asian Culture

哲学から食べ物まで
アジア文化から刺激を受ける米国人

アンドリュー・ラム 特派員

ベトナム生まれの米国人ライター、アンドリュー・ラムは、エスニック・メディア（訳注 特定の民族・言語集団などを対象とする報道機関）の連携・支援に携わる非営利組織「ニュー・アメリカ・メディア」の編集者である。最近の著書に「Perfume Dreams: Reflections on the Vietnamese Diaspora」がある。

もし「コギ」という名前で親しまれている、韓国焼肉のカルビを挟んだタコスはまだ食べたことがないなら、ぜひお試しあれ。チリサルサ、キムチ、すったゴマを添えたコギは全く新しい発想の食べ物なので、売っているのは南カリフォルニアを移動する2台のトラックだけだ。トラックの運転手がツイッターで販売スケジュールをつぶやくと、オレンジ郡やロサンゼルスを通りでは人々が列を作って待つ。時には待ち時間が2時間になることもある。米國中の美味しいもの好きが、このトラックの全米進出を心待ちにしている。次の停留所はニューヨーク市だ。

カリフォルニアで始まったものが、カリフォルニアの中にとどまることはほとんどない。全米そして国外にまで野火のように広がっていく。こ

うした創意に富む新しい芸術や文化の多くは、アジア的なものに触発されたり、これを特徴としている。



人気の韓国焼肉サンドイッチ「コギ」は、米国におけるアジアの大きな影響を示す一例にすぎない（写真 © AP Images）

19世紀半ば、カリフォルニアのゴールドラッシュの時代に、中国人が漢方薬や他のさまざまな植物を持ち込んで以来、アジアは米国に文化的影響を与え続けている。しかしアジア系米国人の人口増加に伴い、アジアの影響が大きな規模で広がり始め、尊敬に値するもの、さらには望ましいものになったのは、1980年代以降にすぎない。その結果、かつては民族固有のもの、あるいは難解とさえ考えられていたものが、文化の主流に流れ込み、そこにとどまり、主流の習慣と混じり合っており、文化的風景を一変させている。

米国の大都市の公園に行けば、肌の色も民族も

さまざまな米国人が、中国に古くから伝わる太極拳をしているのを目にする。魚醤（ぎょしょう）やわさびはスーパーで簡単に見つかる。テレビをつければ、子ども向けチャンネルを日本のアニメが席巻している。2009年のアカデミー賞の各部門では、クイズ番組で優勝したスラム街の住人を描いたインドの映画作品「スラムドッグ\$ミリオネア」が最も数多く賞を獲得した。

はり療法や、古来の精神修行法であるヨガの人気、そして米国文学の著者の多くが南アジア系や中国系の姓を持っているという事実は、もはや目新しいことではない。新しいのは、アジア文化が徐々に発展し、21世紀になると完全に溶け込み、アジア文化を実践・推進しているのが非アジア系米国人であるという状況が多く見られるようになったことである。

例えば、スティーブン・スピルバーグの映画「カンフー・パンダ」は、2008年に中国で興行的に大成功を収めた。映画がとても人気があったため、多くの中国人思想家や作家たちは、なぜ中国で同じ映画を制作できなかったのか不思議に思った。ある中国人批評家は「パンダとカンフーは中国の宝だが、外国人にそれを思い出させてもらう必要がある」と語った。

「カンフー・パンダ」が中国に旋風を巻き起こしたように、米國中をあっと言わせたのが、ジャバウォークーズというダンスグループだ。このグループのヒップホップ・ダンスのレベルの高さは、

見る人をゾクゾクさせるほどで、音楽テレビチャンネルMTVの「アメリカズ・ベスト・ダンス・クルー」賞に輝いた。10人のメンバー中、7人がアジア系だった。私のジャーナリストの友人は「長い道のりを経てようやく、金髪の間人がヨガや、はり療法を教え、黒人がカンフーの試合で勝利し、アジア系がヒップホップダンスでチャンピオンになるに至ったのです」と感想を述べた。

それでいいではないか。「アメリカ 2.0 (米国再生)」にテーマがあるとすれば、それは混成とリミックス (再度混ぜること)、そして多様な伝統である。ミスマッチ (不釣り合い) な組み合わせがおしゃれになった。現大統領バラク・オバマの経歴ほどこれを体現しているものはほかにない。次のように例えてみてはどうだろう。ここサンフランシスコで開催されるチャイナタウンの正月パレードで舞う龍の下で、ラテン系・ロシア系移民やサモア人が中国人と一緒に踊っている。これは、新しい米国にふさわしい詩的イメージだ。

西洋は東洋を変えたことは確かだ。しかし海外に出店するマクドナルドに対し、米国の主要都市にはタイやベトナムのレストランが建ち並んでいる点も考慮すべきだ。東洋も西洋を大きく変えている。つまるところ、風水・はり療法の効果を信じて、誰もが最終的には、古代の道教の僧が見た、宇宙を流れる不思議な力「気」を認めることになる。古代のヨガ行者のように、ある程度の悟りに触れることなく、ヨガや瞑想 (めいそう) をする人はいない。



アジア文化の人気や影響の大きさは、米国ではもはや目新しくない、と本稿の著者アンドリュー・ラムは語る (写真 Courtesy photo)

ハーバード大学の儒教研究者、杜維明教授は21世紀を「第2の基軸の時代」と呼ぶ。「今はさまざまな伝統が共存し、そこから選択できる初めての時代だ」と同教授は語る。つまり、今や東洋に住む人々も、西洋に住む人々も、単に自分が育ってきた伝統を受け入れるだけでなく、もっと多くの選択肢が与えられている。

米国の歴史は、(西洋の人間が) 東洋を思い描くことから始まった。コロンブスを西方への航海に駆り立てたのは、中国とインド諸国、そしてその豊かな土地を探し求める気持ちだったが、コロンブスが発見したのは中国やインド諸国ではなく新大陸だった。西洋が思い描く東洋は今も魅力的である。そして、この叙事詩のような壮大な出会いはまだ終わっておらず、21世紀の始まりに劇

的な転換期へ近づいているにすぎない。コギのトラックが未来だと想像してみよう。ラテンアメリカと東アジアがロサンゼルスで出会って、おいしい軽食が生まれた。コギのトラック運転手が新しい販売場所をツイッターでつぶやくと、米国の国際化の最前線の場所が変わるかもしれない。

Multiracial Family and Identity

多民族家族から生まれた 独自のアイデンティティー

異なる文化の間を行き来して
まるで「10カ国語を話す」ような生活を
送るようになった作家レベッカ・ウォーカー

ソニヤ・ウィークレー
米国国務省スタッフライター

レベッカ・ウォーカーは、ベストセラー「Black, White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self」の著者である。この本は、複数民族の血を引く人間のアイデンティティーに関する回顧録である。両親の離婚後、ユダヤ系白人文化とアフリカ系米国人が多数を占める文化の間を行き来したウォーカー氏は、インタビューで、アイデンティティーを切り替えることは難しかったが、複数の文化を経験したおかげで、活力に満ちた包含的な世界観を形成することができたと語った。

問 あなたが育った家庭は、ユダヤ系白人の父と黒人の母という、人種的な特徴を持っていただけでなく、離婚によって引き裂かれていました。父親側か母親側のいずれかに対して疎外感を感じたことはありますか。

ウォーカー 私は、公民権運動の時代にミシシッピ州で生まれました。父はニューヨーク州ブル

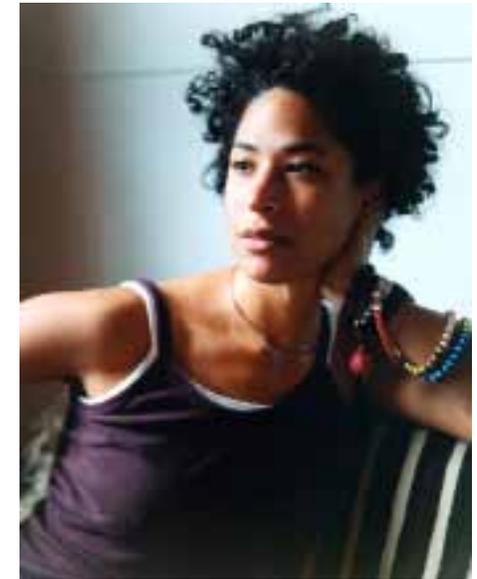
ックリンの出身で、母はジョージア州の出身でした。（両親が離婚した時）私は8歳でした。彼らはそれぞれ、人種によって分離された地域に戻りました。正式に分離されていたわけではなく文化的に分かれていた地域です。サンフランシスコで黒人中心の社会にいる時には、白人の血が半分入っている、あるいはユダヤ人であると口にするのは危険でした。同じことは、東海岸のニューヨーク州ウェストチェスター郡でも言えました。私の肌の色から、私が100%白人でないことは一目瞭然でしたが、私はそのことについてあまり多くを語りませんでした。

問 混乱しませんでしたか。

ウォーカー とても複雑でした。新しい社会に入ったり、新しい学校に行く時には、人々の行動の仕方や、好んで買うもの、言葉遣い、どのような文化活動をするかを見極めなければなりません。まわりに溶け込み、身の安全を守り、受け入れてもらうために、常に変わらなければならぬと感じていました。とても混乱しました。

問 そういう状況についてどう思いましたか。

ウォーカー 当時はとても嫌でした。新しい環境になると、自分はどうすべきなのかわかりませんでしたし、とても緊張しました。結局、ほぼ毎年、違う学校に通うことになりました。どの学校にも、人種的な違いだけでなく、階級、宗教、政治的信念といった問題がありました。とても大きな違い



両親の離婚と人種問題で傷ついた子供時代を過ぎたレベッカ・ウォーカーは、さまざまな文化に基づく独自のアイデンティティーを築き上げた（写真 Courtesy photo）

でした。

問 人々があなたとのかかわり方を決める要素のひとつが人種であることに気づいたのはいつごろですか。

ウォーカー 最初に気づいたのは、小学校4年生の時です。好きだった男の子に、黒人の女の子は好きじゃないと言われ、突然パニックに陥りました。何が何だかさっぱりわかりませんでした。私はそういう人間なのか。突然、他人が私を見る目と、私が私自身を見る目が違うことに気づき

ました。

問 あなたは成長する過程で、周りの人々から「黒人、混血、有色人種、プエルトリコ人、メキシコ人、エジプト人、インドネシア人、あるいはギリシャ人に見られたが、(中略)誰とでもつながることができた」と語っています。どのようにして誰とでもつながることができるようになったのですか。

ウォーカー それは10カ国語を話すようなものです。保守派であろうと、共和党であろうと、由緒ある家柄であろうと、WASP(アングロサクソン系白人新教徒)であろうと、米国のどの社会にも入っていけるし、何らかのつながりを感じることができます。なぜなら、そうした世界の学校に行ったことがある、あるいはそうした世界の友達がいるからです。キヌア(訳注 南米産の穀物)を食べるグループや遺伝子組み換え生物に反対するグループなどの小規模な共同体、都市部の黒人、サモア人、ドミニカ人、メキシコ人、ラオス人の社会にも入ったことがあるからです。ケニアのイスラム社会で長期間過ごした経験もあります。またメキシコでは、厳しいカトリック教義を理解しました。通常は、私が相手の出身を理解して敬意を払っていることを分かってもらえるような、真摯(しんし)な方法で意思の疎通を図ることができます。

問 それは、自分のアイデンティティーを変えられるということですか。

ウォーカー ある意味、人種的・文化的アイデンティティーは、成長する過程で選択されるものであり、与えられた台本に従って行動するか、独自の台本を作り出すか自分で決められることに気づきました。自分を順応させなければならない経験をしたことのない人は、自分で台本の書き換えが可能だと理解できない場合が多いと思います。

問 あなたは「人種による識別の必要性をなくす方法はまだ見つかっていない」と言っています。私たちの社会やその一部に、こうした必要がなくなる兆しは見えていますか。

ウォーカー もちろんです。大学のキャンパスに行くと驚きます。私が(エール大学に)在学していたころ、大学の食堂に入っていくと、歴代学長の肖像画が飾られていました。全員が白人でした。常に人種間の闘争を意識していた私たちは、それを批判しました。最近、(同じ食堂で)黒人の学生ばかりのテーブルに座った時に「皆はこれについてどう思う?」と聞くと、「そんなことは考えないし、話もしない。それほど重大な問題ではない」という答えが返ってきました。私にとって実に衝撃的でした。

彼らが人種をどう論じるかに興味がありましたが、特に不満を持っていませんでした。この学生たちはより恵まれた立場にいますが、人種が怒りを感じる必要がある阻害的な要因であると思っています。

問 それは良いことですか、悪いことですか。

ウォーカー 良くもあり、悪くもあります。こうした状況は私たちも望んでいますが、この問題がまだ終わっていないという事実を見失ってほしくありません。「もう終わったことだ。人種問題は終わった。今は人種問題後の時代だ」という声を聞くのがっかりします。さまざまな資源の利用や本当の権力を手に入れるという点では、人種間格差が現前にあります。文化的には、水面下で起きていることを見失うわけにはいきません。

問 若者たちは、自分たちの文化的伝統や先人の苦難を覚えておくべきですか。それとも、すべて忘れるべきでしょうか。

ウォーカー 両方が必要だと思います。私は、一方は奴隷制度、もう一方はホロコーストという闘いの歴史と深く結び付いた2つのグループに属しています。良い意味での自尊心を与えてくれ、何か得るものがある限りにおいては、人々は過去に敬意を払い、称賛すべきですが、ほかの生き方ができないほどの過去への執着は健全でないと思います。

その一方で、若者たちがいろいろなものを捨ててしまい、問題の多い大衆文化以外に実質的な支えを持たないという問題があります。彼らが世界に踏み出す時に、「アメリカらしさ」を発揮する何か新しいものを与えなければならないと思います。大量消費主義やほなほだしい階層化のために

自分たちの文化を手放すよう若者に言うことはできません。

問 人種問題後の社会の展望がありますか。あるいは、人間が人種によって識別されるか、あるいは自ら人種によって識別されることを選ぶか、ということは、私たちの社会の「成功」にとって重要なことですか。

ウォーカー 米国にとって最も重要なことは、自己肯定的であっても、孤立的でないアイデンティティを示すことだと思います。人種問題は、資源をどのように分配するか、誰が教育を受けられて誰か受けられないのか、世界的にみて米国の競争力はどのくらいあるのか、といった現実的な問題から私たちを遠ざけるために利用される可能性があります。

ですから、人種問題後とか、人種問題前とか、人種とか、そういうことは重要ではないと思います。私は人の自我を奪うつもりはありません。しかし、人種問題に巻き込まれ、気をそらされ、後先を考えず関与するよりも、取り組む必要のある、もっと深刻な問題に力を注ぐよう働きかけたいと思っています。人種間のあつれきは、この国を弱体化させることになります。

問 文化的な意味において、米国人であることはあなたにとって何を意味しますか。

ウォーカー 自分があちこち移り住み、複数の文

化に親近感を感じることは、極めてアメリカ的なことだと思っています。旅をすると、異なる文化を持つ人たちが、しばしば単一の文化しか持たないように認識されていることに気づきます。共通の利益のために必要な限りにおいて、私たち米国人は、文化的アイデンティティに執着しないよう促されていると思います。それは良いことであり、この傾向が世界でも広まればいいと考えます。その点で私はたいへん恵まれていると思いますし、多くの人々もそうだと思います。私は米国人であることをとてもうれしく思います。状況が良くなる可能性はあるでしょうか。あると思います。悪化する可能性はあるでしょうか。あると思います。私たちはこの国の約束を満たすために、日々努力しているでしょうか。私たちの大半は努力していると思います。そして、その精神、バラク・オバマ大統領を選出したその精神を、私はとても誇りに思います。

Religious Freedom

信仰の自由という約束を守る

ダイアナ・L・エック

米国の基本理念に信仰の自由と政教分離がある。200年以上も前にこの国が建国された当時は、圧倒的多数の米国人がキリスト教徒であった。しかし、本稿の著者がその著書「A New Religious America (邦題『宗教に分裂するアメリカ』)」で記すように、米国はその後(特に過去数十年の間に)、世界で最も宗教的に多様な社会となった。

ダイアナ・L・エックは、マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学で比較宗教学とインド研究の教授を務め、神学部でも教えている。オハイオ州トレド郊外にあるトウモロコシ畑の



増加する地域の仏教徒のために2007年にミネソタ州に開設された寺院(写真 © AP Images)

中には、尖塔を持つモスクの巨大な白いドームがそびえ立っており、高速道路を車で走るとそれが目に入る。テネシー州ナッシュビル西部の郊外には、象の浮き彫りが戸口に施されたヒンズー教の大寺院が丘の中腹に建っている。ミネソタ州ミネアポリス西部の農村には、東南アジア風の屋根をしたカンボジアの仏教寺院と僧院がある。

米国の宗教的風景は、この40年間に、徐々にではあるが非常に大きな変化を遂げた。この変化は、1965年米国移民・帰化法(訳注 出生国に基づく移民数の割り当てを廃止した)によって「新たな移民」が促進され、(ヨーロッパ以外の国々など)世界中から米国に移民がやってきて市民権を獲得したことから始まった。移民と共に世界のさまざまな宗教的伝統、例えばイスラム教、ヒンズー教、仏教、ジャイナ教、シーク教、ゾロアスター教、そしてアフリカ人やアフリカ系カリブ人の伝統が持ち込まれた。これらの宗教の信者たちは最初はためらいがちに、人目に触れないよう、米国人が住む近隣社会の店舗や事務所、地下室、車庫に祭壇や礼拝所を持ち込んだ。しかし、1990年代以降、その存在が明らかになってきた。すべての米国人がトレドのモスクや、ナッシュビルの寺院を見たことがあるわけではないが、自分たちが住む地域でそれらに類似する建物を見るようになるであろう。これらの建物は米国の新たな宗教のありようを、建築の面から示している。

例えば米国人は、多くの内科医、外科医、看護師がインド系であることを知っているが、こうし

た医療専門家に信仰生活があり、朝、家の祭壇で祈りをささげたり、地元のシバビッシュ寺院に果物や花を供えているかもしれないとか、100万人を超える多様なヒンズー教徒の一員かもしれないなどと考えることはない。私たちは、メキシコや中米からラテン系の人々が移住してきていることや、都市にはスペイン語を話す人が大勢いることについては十分承知している。しかし、このことが、賛美歌の歌い方から祝祭のあり方に至るまで、カトリックかプロテスタントかを問わず、米国のキリスト教に重大な影響を及ぼしていることには気づいていないかもしれない。

広範囲に及ぶ多元性

歴史研究者によれば、米国は常に多数の宗教が存在する国であった。ヨーロッパからの入植者が北米大陸の沿岸に到着する以前から、広範囲に及ぶ多元性が先住民の間に存在していた。メリーランド州のピスカタウェイ族から、モンタナ州のブラックフィート族に至るまで、さまざまな先住民の宗教が現在も引き続き実践されている。また、ヨーロッパから大西洋を渡って来た人々も、スペインとフランスのカトリック教徒、英国の国教会教徒とクエーカー教徒、ユダヤ教徒、オランダ改革派キリスト教徒など、さまざまな宗教的伝統を持っており、その多様性は何世紀にもわたって拡大を続けた。奴隷貿易でアメリカ大陸に連れて来られたアフリカ人の多くはイスラム教徒であった。西部の炭鉱や農業での成功を求めてやってきた中国人や日本人は、仏教、道教、儒教が混じり

合った伝統を持ち込んだ。19世紀には、東ヨーロッパのユダヤ人、アイルランド人、およびイタリアのカトリック教徒が多数やってきた。中東からはキリスト教徒とイスラム教徒の両方が移住してきた。インド北西部に住むパンジャブ人が移住したのは、20世紀の最初の10年間のことだった。その大部分はシーク教徒で、カリフォルニア州に入植し、米国で最初のグルドワラ（シーク教徒の礼拝所）を建て、メキシコ人と結婚し、シーク教徒とスペイン文化が融合した豊かなサブカルチャーを築き上げた。こうした人々の物語は、米国の移民の歴史の重要な一部である。

しかし、最近の数十年間に移住してきた人々により、信仰生活の多様性は飛躍的に拡大した。仏教徒がタイ、ベトナム、カンボジア、中国、韓国から、ヒンズー教徒がインド、東アフリカ、トリニダード・トバゴから、イスラム教徒がインドネシア、バングラデシュ、パキスタン、中東、ナイジェリアから、シーク教徒とジャイナ教徒がインドから、そして、インドとイランからゾロアスター教徒が移住した。ハイチとキューバからの移民は、アフリカ系カリブ人の伝統を持ち込み、アフリカとカトリックの象徴と偶像を融合させた。ユダヤ系の移民が新たにロシアとウクライナから移住し、米国のユダヤ教の多様性はかつてないほど拡大した。米国におけるキリスト教の様相も大きく変化した。ラテンアメリカ出身の人々、フィリピン人、ベトナム人カトリック教徒の大規模なコミュニティや、中国人、ハイチ人、ブラジル人のペンテコステ派のコミュニティ、さらに韓国

人の長老派、インド人のマー・トーマス派、エジプト人のコプト派などの存在によってである。米国のどの都市でも、古い郊外のプロテスタント教会やカトリック教会の看板には、そこで開催される韓国人あるいはラテンアメリカ人の信徒集会の時間が示されている。

過去数十年の間に、移民や難民として人々が大量に移動することによって、世界の人口動態が変化した。国際移住機関によると、2005年の移民の数は全世界で1億9000万人に上り、うち約4500万人が北米への移民であった。現代世界の常に変化するイメージは、いわゆる文明の衝突ではなく、さまざまな文明や人々が「入り混じっている状態」である。ちょうど冷戦の終結が、新たな地政学的状況をもたらしたように、人々の世界的移動は、新たな地理宗教学的（georeligious）現実をもたらした。ヒンズー教徒、シーク教徒、イスラム教徒は、今では英国における宗教の一部分を成し、モスクはパリとリヨンに定着しており、トロントには仏教寺院があり、バンクーバーにはシーク教徒のグルドワラがある。しかし、大量の集団移動が行われる今日の世界でさえ、米国ほど多くの信仰が存在する国はない。これは、驚くべき新たな現実であり、私たちが初めて経験することである。

コミュニティの課題

新たな移民の時代は、規模や複雑さ、そしてその動きで、これまでの時代と異なる。今日、米国に移住する人々の多くは、母国との強いきずなを



インディアナポリスの寺院の開院式典に参加した、さまざまなヒンズー教徒たち（写真 © AP Images）

保ち、旅行や、電子メール、携帯電話、ケーブルテレビのニュースなどを通じて結びついている。彼らは、何とかして母国と米国の両方で暮らそうとする。古くからの市民と新しい市民が、こうした多様性をすべて受け入れた時、米国の理念や理想はどのようになるのだろうか。米国憲法の最初の言葉、「われら合衆国の国民は」を口にした時、その「われら」とは誰のことを意味するのか。これは市民とは誰かという問題となる。なぜならそれは、私たちが属していると考え「想像の共同体」につながるからである。また、それは信仰の問題でもある。なぜなら、いかなる宗教的伝統を持つ人も、今日では、世界各地に、また通りを隔てて、自分とは異なる宗教を信仰するコミュニティが存在する世界で生きているからである。

私たちの子供が、イスラム教徒の級友と親友だったり、ヒンズー教徒が学校の教育委員会の選挙に立候補する時には、誰もが市民として、また信

仰を持つ者として、周囲の人々に対し新たな利害関係を持つようになる。

21世紀が展開するにつれ、米国人は、米国の理念とイメージの基本である、信仰の自由の約束を果たすよう求められている。信仰の自由は常に宗教の多様化をもたらしてきた。そして、今日ほど私たちの多様性が劇的であったことはこれまでになかった。だからこそ、私たちが堅持するこうした理念の最も深遠な意味を思い出し、この豊かな多様性を受け入れるだけでなく、これが国力の源泉となるような、真に多元的な米国社会を築くことが求められている。そのためには、私たちすべてが、互いに理解を深め合い、新たに米国人となった人々が、さまざまなやり方で「われら」を表現し、米国のありように貢献する様子に耳を傾けることが必要になる。

21世紀初めの米国で、これほど宗教が多様化するとは、米国憲法と権利章典の起草者たちに想像もつかなかったであっただろう。しかし彼らがこれらの文書で明確に示した理念、つまり宗教の「非国教化」と宗教の「自由な実践」は、米国で宗教の多様化が進む中、過去200年にわたり、米国の揺るぎない指針となってきた。憲法の起草者たちには想像もつかなかったが、彼らのおかげで受け入れられる宗教の多様性を、米国は認め始めている。

宗教は、包装して配達され、そのまま世代から世代へと引き継がれる完成品ではない。どのよう

な宗教にも、そのように宗教をとらえ、あらゆるものが聖典、教義、儀式によって定められていると主張する人がいる。しかし、少しでも歴史を振り返れば、彼らが間違っていることが分かる。私たちの宗教の伝統は、静的でなく動的であり、固定されたものではなく変化するものである。記念碑のように不動のものではなく、むしろ流れ行く川のようなものである。現在の米国は、生きた宗教の変化に満ちた歴史を学ぶことができる刺激的な場所となった。なぜなら仏教は極めて米国的な宗教のひとつとなったし、キリスト教徒とユダヤ教徒は、仏教徒に出会ったことによって、自らの信仰をあらためて表現したり、自らがどちらの伝統も受け継いでいると理解するようになったからだ。ヒューマニスト、世俗主義者、そして、無神論者でさえ、複雑さを増した宗教の現状に照らしあわせ、自らの世界観を見直さなければならない。複数有神論者のヒンズー教徒と、非有神論者の仏教徒がいるとすれば、無神論者は、自分たちがどのような「神」を信じないのか、より具体的に説明する必要があるかだろう。

私たちの宗教の伝統が変化するように、米国の思想そのものも変化する。米国のモットーで、「多数からひとつへ」を意味する「E Pluribus Unum」は既成事実ではなく、米国人が絶えず求め続けなければならない理想である。米国における多数の民族と、ひとつの国家の構築の物語は、さまざまな理想を絶えず実現していく未完の物語である。さまざまな人種と顔かたち、ジャズとカウワリの音楽、ハイチのドラムとベンガルのタブラリ、ヒ

ップホップとバングラダンス、マリアッチとガムラン、イスラム教寺院の尖塔とヒンズー教の寺塔、モルモン教寺院の尖塔とシーク教寺院の金色のドームなど、米国の「Pluribus = 多様性」は著しく高まった。この多様性の中で、米国の「Unum = ひとつであること」を表現するには、独自の方法で貢献する、多数の新たな声が必要となるであろう。

21世紀の新しい米国を思い描くには、想像力の飛躍が必要である。つまり、複雑な米国の宗教的風景を隅から隅まで眺め、理解する必要がある。

ハーパー・コリンズの一部門であるハーパー・サンフランシスコ出版社が出版したダイアナ・L・エック著「NEW RELIGIOUS AMERICA」からの出典。

Photo Gallery

アイデンティティーについての考え方

「典型的」米国人を表現することはほぼ不可能に近い。人種、民族、宗教が異なる人々で成り立つ米国には、バラク・オバマ大統領が就任演説で触れたように、「多様性という遺産」がある。自らの民族、人種あるいは社会的アイデンティティーを表明するにもかかわらず米国人と認められる自由は、人はそのアイデンティティーを自ら選択すべきであり、他人の自由も同じように尊重しなければならないという信念に基づいた共通の理想である。われわれや他国の人々をどう定義するか考える参考として、以下にアイデンティティーに関する考え方をいくつか挙げる。

バラク・オバマ大統領は2008年3月に「より完全な連邦」と題した演説で、「私はケニア出身の黒人の父親と、カンザス出身の白人の母親として生まれた息子です」と語った。また「私にはあらゆる人種、あらゆる肌の色を持つ兄弟、姉妹、めいやおい、おじ、いとこがいて、3つの大陸のさまざまな場所に住んでいます。地球上の米国以外の国では、私のような経歴はありえないことを、生きている限り決して忘れません」とも述べた。



(写真 © AP Images)



「米国とベトナムという2つの文化を持っていることは、とても幸運だと思います。この2つの文化の経験は私のアイデンティティーを二分するものではなく、これによって私は自分の周りの世界を2倍理解し、感謝し、楽しむことができます」と、C・N・リは自身のウェブサイト「アジアン・ネーション」に記している。
(写真 Courtesy of C. N. Lee)



(写真 Courtesy of Tayari Jones)

「多くの友達とは違い、私は『(自分を表す) ラベル』というものに面白さと魅力を感じています。私に関する限り、ラベルは多ければ多いほどいいのです」と、「Leaving Atlanta」、「The Untelling」の著者、タヤリ・ジョーンズは語る。「それが本当のことであり、好きなだけ選ぶことができるなら、ラベルでアイデンティティーが決められても構いません」とも言う。



(写真 © AP Images)

ニューヨーク・タイムズ紙のインタビューで「自分を白人だと思えますか」と聞かれ、バラク・オバマ大統領の異父妹、マヤ・ソエトロ・イングは、「いいえ。私は半分白人、半分アジア人で、自分を混血だと思っています。初めて会った人はたいいてい私をラテン系だと思うようです。それがきっかけでスペイン語を習うようになりました」と答えた。そして、「誰にでも、自分がどういう人間かを自分で決める権利があります」と付け加えた。

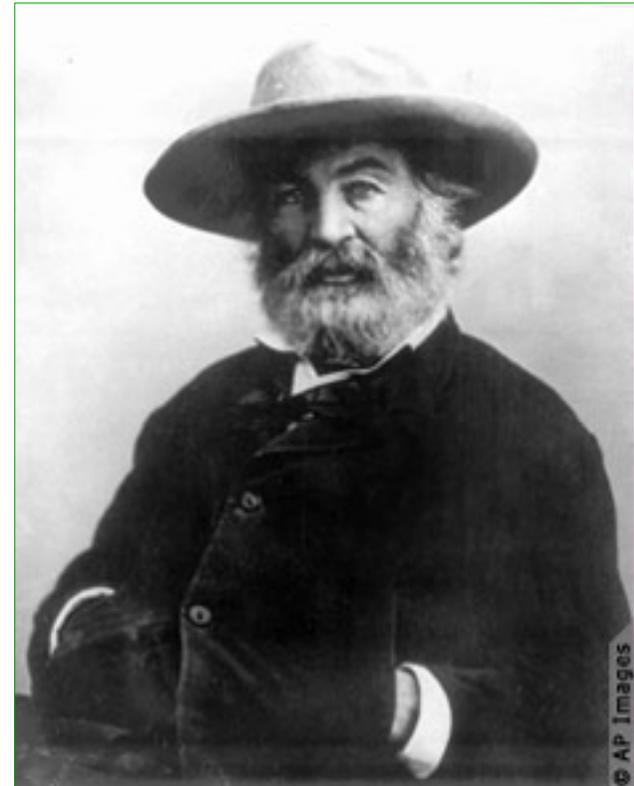


(写真 Courtesy of Persis Karim)

「私の経歴には米国人以外の要素も含まれており、物書きとして、そうした経歴の複雑で微妙な点を表現することに価値や、利点さえも見いだすようになりました」と、詩人で「Let Me Tell You Where I've Been: New Writing by Women of the Iranian Diaspora」の編者でもあるペルシス・カリムは言う。「自分が受け継いだものや人との違いのおかげで、私は自己定義のプロセスを始めることができました。これは、自己定義が固定された宣言ではなく、変化するプロセスである米国でなければ不可能でした。私はそのすべてを書きたいと思いました」



「米国は、大勢の人間が集まった場所であり、その大多数はほかの国からやってきました。米国の国柄は、こうした人々が自らの特性で米国の伝統に貢献し、米国の歌に新しい音色を加えることを認める点にある」と、インターフェイス・ユース・コア（異なる宗教的背景を持つ若者間の相互理解と協力を促進する組織）の創始者である事務局長のエブー・パテルは言う。そして「私はイスラム教の魂を持った米国人です」と言う。



米国の詩人ウォルト・ホイットマンは、母国のアイデンティティについて詩集「草の葉」（1855年）でこうつぶった。

「自己の内に矛盾があるか？
よろしい、では自己矛盾している（私は大きく、内にたくさんのものを抱えている）」